

臨床研究における人形劇の心理効果

齊藤勇紀

人形劇の教育的効果について、金城（2009）は、「人形劇を通して子どもの情緒的発達を促すことができる。子ども同士の会話やコミュニケーション行動の増加や、他者との情愛的結びつきが深まる。さらに、人形劇を観劇した子どもは、自分と他者との差異を知ることや幼児期の子どもの知的発達を促すことにつながる。社会において他者を理解していく力を養うことにつながる。」等、と多くの効果を述べている。しかし、上述した効果については、客観的な心理的効果の測定はなされていない。

一方、劇や人形劇を用いた心理臨床に関する研究は、少数であるがこれまでも報告されている。例えば、井上（1993）は、特別支援学級、通級指導教室に在籍する発達障害児 2 名を対象として、「劇指導場面」を設定し、会話による相手の意識、ことばの抑揚、感情表現への効果についての検証を行っている。指導方法は、モデルとなる VTR を 3 回視聴後、自己リハーサルを行い、自己のパフォーマンスをモニタリングするといった指導方法を用いていた。その結果、コミュニケーション力が乏しい自閉症児が、セリフ内容を適応させながらやりとりすることが可能となり、日常場面においても相手の発する言葉を弁別刺激として、他者との会話が可能になったことを示している。さらに、社会的妥当性の測定を通して、相手の会話意識、ことばの抑揚、感情表現の点で指導効果が得られ、特別支援学級での適応が可能であることを示唆している。

また、子どもの感情表現の発達的な変化の研究においても人形劇を用いた報告が見られる。仲（2010）は、事件や事故の際に、子どもから有用な情報を得るために、子どもが気持ちをどのように表現するのかを発達の視点から調査を行っている。対象児は、127 名（幼児 41 名、小学生 86 名）であった。方法論としては、様々な内容の人形劇（30 秒から 1 分程度）を 10 編用意し、子どもに DVD を示しながら、人形の気持ちを尋ねる。子どもが用いた表現を広く収集し、気持ちを表すためにどのような表現方法を用いるかを検証している。抽出された 2,032 の反応を分析した結果、内的状態の表現には性差が見られ、女子の方が多く、女子は小学校 2 年生から表現が増加するのに対して、男子では小学校 6 年生以降で増加することが示されている。また、内的な状態の種類については、ポジティブな表現よりもネガティブな表現内容が多様であることが示された。このように人形を用いて、子どもの発達のデータを蓄積することで、子どもとの面接での反応を推定したり、面接計画を作成したりするために有用であることが示されている。

以上のように、人形劇を用いることで、発達に困難さをもつ子どもへの行動レベルでの効果や、感情表出のツールとしての効果が示されている。今後は、子どもの発達や人格形成についてのさらなる客観的なデータの蓄積が課題であると考えられる。

【引用文献】

井上雅彦(1993).自閉症児における「劇指導場面」を通じた会話訓練プログラムの作成と検討 ——個々に応じた援助技法の使用とその効果—— 障害児教育実践研究 ,1, 25-37.

金城久美子(2009). 倉橋惣三と人形劇 ——幼稚園教育への導入の動機と目的に関する一考察——. 幼児教育史研究, 4,13-27.

仲真紀子 (2010). 子どもによるポジティブ、ネガティブな気持ちの表現 ——安全、非安全な状況にかかわる感情語の使用—— 発達心理学研究, 21,365-374.